

# ドイツ語の発音Ⅲ, n と l について

エン・ウィルウェーバー

## 緒言

長年ドイツ語にかかわっていると、如何に日本語の発音がドイツ語をはじめとする欧米語や中国語、韓国語、ロシア語等と異なるかを深く感じる。舌先三寸というように、日本語では舌音に舌先が使われる。そしてドイツ語その他では舌先でなく舌の上面を使っている。このことを筆者は長年の間気付いていた。然し特に気になければ、その差は日本ではあまり目立たないことが多い。そうして「要は、ドイツ語が通じればよいではないか」という結論に圧されて終わってしまう。但しドイツ語らしく聞えるようにしたり、良いドイツ語を使うには、そして更により深く文学的なことを感じとるには、母音と同様に、時には母音以上に、子音にもっと気を配らねばならない。子音が舌音である場合には、舌先ではなく、舌の上面を使うことをせねばならない。それはその前後に来る母音の発音が影響を受けるからである。即ち舌先を使えば日本語的な母音になるからである。外国語の初級の教科書や文法書をあけると、はじめに必ず出てくるのは発音に関する数ページである。筆者は40年来、いつかは、母音と同様に子音の大切なこと、そのためには舌の使い方を正しくすることが記されている本が出るのを期待してきた。然し筆者の知る限りではまだ見つけていない。

そして、前年偶然に一つの事実に気がついた。それは犬はワンワン猫ニャーニャーという、昔から変らぬ、しかも日本列島どこへいってもなまりのバラエティもなく、誰にでも通じる日本語を英独仏等の欧米語に比べていた時である。犬のワンの[ン]と、猫のニャーの[ニ]についてである。何れも[ン]とナ行の音として聞いて疑わないのは日本人である。ところがこれらのなき声はドイツ語をはじめ欧米語ではナ行[n]の音としては受けとられていない。今後英語がますます普及し、正しい発音のできる人が増える時、このナ行に対する日本人の特別な耳に気付かれることであろう。ドイツ語を習う者は何の気遣いもなしに、自分の耳にひびき、自分にできる発音によって学んでもよいであろう。然し教える立場にある者は、注意してできるだけ標準とされる発音やアクセントを身につけるべきである。発音を音声学の分野であるとして、重要視せずに過ぎることは、ラテン語のような死語でない限り許されない。自からの発音をできるだけ正しくするように努力するのが、教える者の道であると言いたい。大正、昭和初期の頃は、筆者の習った英語教師の中には、

tやdの発音を、例えばit イット、team チーム、hand ハンド、A B C Dをエービーシーデーに近く言って英語を教えていた先生もあった。今日では子供でもティー、ディーと発音できる。今後更に正しい発音に近づいてゆくであろう。

ここではドイツ語を主として舌音につき謂る欧米語では舌先を使うのではなく、舌の上面を使うことや、舌の上面を上あご（歯茎と硬口蓋）にあてて出す子音の中、特にnとlを中心に、例をあげて述べてみたい。nとlの発音の要領をつかめば、他の舌音は自然にこれにならって発音できる。例をあげるに当って、筆者の長年の体験と同時に、ラジオの放送を利用した。放送される外国語講座は録音されるので、実例として役立つ、又現在の傾向も実例として受取ることができると思う。

## 1. 日本語のンとナ行の発音

日本語のンは文字の構成から言えば唯一つの子音（半子音）であって、ウンと読まれる。その時舌先は必ずしも上前歯のはぐきの裏（歯茎）にふれて発音しなくても良く、従って[n]に近い。然し一般には[n]をその表現にあてている。教科書にも[n]で記されている。又日本語特有のンの表現に[N]を用いられることもあるのを見たり聞いたりする。

赤ちゃんが何か発音したり、片言を言いはじめる頃、一般にまず聞かれる音は唇音のママ、ウマウマ、又は舌音のダダダ、時にはチャチャチャ等である。この時のベビーの舌はペタリと上あごについて言っている。この点は日本も欧米も変りはない。日本ではやがてベビーはこれより、舌先とはぐきの間から出すナ行やラ行をはじめとする舌音が発音できるようになってゆく。すなわち日本語の舌先で発音するナニヌネノやラリルレロは後に展開したと考えられる。抱っこしている日本の幼児にhalloを言わせると、誠にきれいに、純粹に、正しく舌の上面でlの発音を聞かせてくれる。この年令の幼児にはまだ舌先を使うのは充分にできないように見える。そして次第に親の話すのを真似て、ラリルレロやナニヌネノ、ン等を習得してゆく。一旦舌先を使う発音ができるようになると、舌面を使うことは、中学校で初めて英語を習うまでは必要でないので、忘れられてしまう。その上英語を習っても、舌面を使うことは注意されないの、舌先でする発音のままに外国語の学習は進む。

舌先を使うのと、舌面を使うのとでは、あと又は前（後述）に来る母音の発音が影響をうけて変化する。例えばラとlaの場合を比べる。声楽でララララ…と歌う時、舌先を使うとラの母音の部は[a]に聞えるが、舌面では[a]に近くなる。舌先が前歯の歯ぐきにふれる時、口腔は広く、従ってアは前方で言われ、[a]になる。舌面を使うと、母音のアは自然に口腔の奥へ押しやられて[a]になる。合唱を聞いている時、ララー、ララーが歌われると、日本人の合唱では[a]になるので、浅く、平たく聞え、欧米人の場合は[a]に出るので厚みがあり、柔らかく耳にひびく。この時の口もとをみていると、舌が横一文字に

ペタリと気楽に見え隠れしている。ドイツ語をはじめ、その他の欧米語の声乐を学ぶ時は、舌の上面を使うことを練習しないと、声が良くても、深みのある立体的な歌声が聞かれない。

ンを発音する時、舌先を上のはぐきにつけないことは[n̥]のように聞えることになる。このために日本語を外国人に伝える時は聞きとられにくい。例えば日本の住所氏名等を外国人に書きとって貰おうとすると、必ずと言って良い程聞き返される。日本語（ニホーゴ）、三宮（サーノミヤ）、本郷（ホーゴー）、本願寺（ホーガージ）、祇園（ギオー）のように聞えるらしく、くり返しているとイライラした表情をする。

日本語にもンが[n]に、即ち舌先を歯ぐきにふれさせてリエゾンして発音する場合がある。例えば、反応（ハンノー）、観音（カンノン）、安穩（アンノン）、云々（ウンヌン）等である。野球用語の one out はワンナウトと老人でも言う。アメリカ人の発音を真似て日本語化したからであろう。

これとは反対に、日本人の発音するドイツ語や英語その他は、筆者の知る限りでは「ン」が聞えにくい。ins Meer（イースメーア）、eins（アイース）、in einem Studentenheim（イーアイネム シュトゥデーターハイム）、meanwhile（ミーワイル）に聞える。

## 2. ドイツ人の日本語の発音

それではドイツ人その他欧米人が日本語を話す時は、どんなことが起こるのであろうか。日本語にはlやrの発音がなく、ラリルレロであり、nにはンがあてられている。欧米人はnをみると、反射的に舌面がピョンと上あごととびつくように見える。とびつかせないためには[n]ではなく、[n̥]を注意書きせねばならない。又日本人のンの発音は[n]には聞えない。ドイツ人に電車と言わせるとデン[n]チャという。デン[n]のところで舌面が上あごにつくために、次のシャはチャとならざるを得ない。無理にシャを言わせるとデン[n]のところで一度舌を上あごから離してからでないとシャは発音できない。当然舌を離す音が無声のヌとして聞える。即ちデンヌシャという。今晚わ、と言わせるとコンヌバンヌワと言う。バもワも舌音でないために、[n]を発音したあとは、いやでも舌を一旦離さなければ、バもワも言えない。安心はアンチン、満員マンニン、電話デンヌワ、練習レンチュー、全員参加ゼンツァンヌカ、ふんいきフニキ、エンジンをはける エンヂノカケル、ふとんを出す フトノダス、新聞シンヌブンス、と発音する（NHKラジオ、ひとくち英会話、MAKSIMAK, Mike, 1986 4-7月号）。

## 3. 日本人のドイツ語の発音

一般に日本では中、高校で英語を習い、その後にドイツ語やその他の欧米語を習う。生れた時からふれているのではない外国語を、その国の人と同様に使い、話すことは非常に

むずかしい。然し成可くその国の言葉らしく話したいと誰しも努力する。ドイツ語らしく聞えるように発音する方法の一つとして、ドイツ人が日本語の中でどの発音を日本語らしく言えないかという点に注意するとよい。そしてこれらの点を逆に使って、そのような日本語の発音をドイツ語に混入しないことである。例えば、n や l の発音が日本式であるために毎日のように耳に入って来て気になるものをあげると、eins はアイース、Menschen ムーシェー、Röslein, Röslein rot レースライ、レースライ ロート、ins Meer イースメーア、als アース、els エース、Englisch エーギッシュ 又は イーギッシュ、in einem Studentenheim イー アイネム シュトッデーターハイム、Anfang アーファァグ、manchmal マーヒマー、寛一郎 カーイチロー、Dann bin ich ダー ビー イヒ、Sie haben schon einen Mann ジー ハーベアー ショー アイネー マー、Geld ゲート、sein と haben ザイーとハーベアー、Konstanze コースターツェ、Klingemann クイーゲマー、Bruhns ブルース、once more ワースモアー、Bonn summit ボーサミット（某サミットと聞き違えた）、John Henry ジョー ヘーリー、flowes ファワーズ、challenge チャエンジ、it means イット ミーズ等限りがない（NHK ラジオ ドイツ語講座 1986 4—7月号、英語会話 1986 4—7月号、続基礎英語講座 1986 5—7月号）。

ここで日本人は欧米語の学習に以上の事実を逆に応用して、少くとも、舌先を使ってでもよいから、[n]や[l]の発音を会得し、身につけるとよい。例えば ein Hahn はアインヌ ハーンヌ、Manhattan マンヌハタンヌ（ハッタンと促音にはしない。このことについては別に述べた。1975、大手前女子大論集 No.9 促音便 En WILLWEBER）、one hundred ワーハンドレド、John Henry ジョーンヌ ヘンヌリ、eins アインツ、Konstanze コンツタンツェ、Einstein アインチュタインヌ、Puls プルツ、Bruhns ブルーンツ、als アルツ、Mendelssohn メンデルツゾーンヌ、can you キャニュー 又はキャンヌ ユー（この場合は you の y は子音であるからリエゾンしないと説明されたことがあった。そうであればキャン ユーではなくキャンヌ ユー とヌをンにつけて、舌が上あごからはなれる音が聞えるべきである）。この他に、日本語にない r の巻舌やのどひこの発音はむずかしいとしても、誰にでもできる舌の上面を使う t, th, s, d, z 等は注意すべきである。そして促音も日本語式に入れてはいけない。（1975、促音便、大手前女子大論集 No.9）。

#### 4. -ün-の ü は n の発音に影響される

ドイツ語やその他の欧米語の[n]は、舌先を上歯ぐきにつけるのではなくて、舌の上面をべったりと上あごにあてて発音されることは、ドイツ人の口もとを見ていると分る。舌が平になったり、縦に丸く巻くようになってチョロチョロとみえるのを筆者は長年の間知っていた。何故こんなことになるのだろうかと思うた。後年その謎がとけて、証拠を得た。それは fünf の発音であった。ü を発音するのに気をとられるので、次に続く n は

舌をあまりしっかりと上あごにつけていないのが殆どの日本人の場合である。そうすると、ü〔y〕はユ〔ju〕に近くなってフュンフになってしまう。für を発音する時には ü を〔y〕と言えるのに、fünf では ü はユ〔ju〕になってしまう。ここにおいて ü に続く n の発音は、どうしても舌の上面を上あごにつけねば、その前の ü は〔y〕と出ない。n の前にある ü を〔y〕に出す方法は他にないのである。即ち n は舌の上面を使って発音されていることを証明している。

#### 5. l には二通りの発音がある

l も n と同様であって、舌尖とはぐきによるのではなくて、舌面を上あごにつけて発音すると述べてきた。ところで l には今一つの発音の仕方がある。それは舌の両側を左右の歯やはぐきにつけておいて離す時に出す音である。これは側音ではない。舌を離す時の音である。その瞬間、舌の前方上面はヒョイと上あごについて音になる。-ll- のように l が重なる時や、-il-, -el- の綴りの場合にこの発音が是非必要である。例えば Norddeutscher Lloyd ではこれをロイド又はルロイドと、かな書きされている。早く発音されると「ロ」に聞える時もあるが、それでも始めの l と次の l をちゃんと意識して言っている。始めの l は舌の両側から、あとの l は舌の上面から出ている。Bild の場合を考えると、i を発音する時、舌の両側が両側の歯やはぐきについている。そのために次の l は舌の両側の離れる l の音になり、舌の上面はその時上あごにつくので、次の d〔t〕は舌の上面から出る〔t〕になる。決して舌尖のティーにはならない。即ち音に深みがあって、やわらかいひびきになる。

#### 6. 舌音に舌面が使われる理由

日本における n や l の発音の最近の解説として身近かなものの例に、「ドイツ語の発音」(NHK ラジオ, ドイツ語講座 4 月号 1986) をあげてみる。「〔l〕は舌の先を上歯ぐきにつけて発音します」「〔n〕は舌の先を上歯ぐきにつけて鼻にひびかせて出す音」と説明されている。音声学大辞典には、硬口蓋歯茎音(又は単に歯茎音と言ひ、歯茎は内歯ぐきのみを指す)として「この音は舌尖を歯茎に、又は歯茎と硬口蓋に跨がって近付け、同時に前舌部を硬口蓋にやや近付けて、息を出して摩擦させる音である。特に〔l〕,〔t〕,〔d〕などは人によってはむしろ硬口蓋歯茎音として発音する人もいる。」舌音の項では「一般に舌尖、舌端を用いた音を指すことが多く特に舌音だけを項目として扱うことは少い。」と記されている。

然し欧米語を早口に、流暢に話そうとする時、舌尖と舌の上面を両刀使いにこなすことは不可能に近い。舌音の各国に共通な出発点と見てよいベビーのダダダ、チャチャチャ等に舌面が使われているのをみれば、このまま生長と共に、舌面を使うことに変わりがない

欧米語の方が自然に思われる。日本語の舌先を使う方法は進歩した（又は退化）形であるとも言える。

実際に両刀使いが困難であると筆者に感じさせたのは英語の th であった。英語は th が定冠詞として又はその他の単語の中に頻繁に出てくる。するとその度に舌を上歯と下歯の間へつき出し、そして他の音は舌をひっこめて舌先で言ってみるとよい。忽ち舌は出したり入れたり、疲れてしまう。舌先か舌面かの何れか一つにしぼられなければならなくなる。この他ドイツ語の場合を例にあげると ü のあとにつづく舌音を舌面を使って発音しなければ、[y]にならないでユ [ju] となってしまうことを経験する (Schüler, süß, Güter, fünf 等)。

日本では舌先を使って、しかも [n] は [ŋ] に近く発音されているために、猫はニャー犬はワンと聞えて、誰も疑わない。更に学校で外国語を学習してもまだ疑わない。この事から日本語と欧米語の舌音の出し方の根本的な差異に気付くのである。同時にその国の言葉の正しい発音に近づくためには、舌の使い方を考慮することは重要である。これらの多くの事実の裏づけとして、更に実験的研究を行い科学的なデータを取り、その結果にもとづいた研究に発展させたいと思っている。この稿はその前提として、実験的研究の基礎的よりどころにしたい、実例を集め、エッセイとして記す。筆者の恩師、木原均先生が脱稿の四日前に急逝されて心の支えを失った思いに沈み、十分な時間的、思想的予備を今も尚失った思いでいる。

## ま と め

1. 日本語の舌音は舌先と前歯の歯ぐきとの間で発音される。欧米語の舌音は舌の上面と上あごから出される。この差異はその前後に続く母音の発音に影響を与える。従って母音の発音と同様に子音の発音も正さねば、正しい母音が発音され得ない。

2. 赤ちゃんの最初に発音する唇音のママ、ウマウマ等と共に、舌音のダダダ、ジャジャ等も日本、欧米共に同じである。即ち舌音は舌の上面と上あごとの間で発音される。そして欧米語は成人してもこのまま発音されるが、日本語は成長と共に舌先の発音に移っていったと思われる。

3. 正しい欧米語の発音をするには舌面を使う必要がある。このことは特に n と l の発音について観察し、長年経験してきた。日本語のンは [n] の発音として一般に書かれているが、実際には [ŋ] の発音をしている。従って舌先が歯茎のにつかないために、日本人と欧米人の間の会話が互いに分りにくかったり、誤解を生じたりする。

4. ン [n] が実際には [ŋ] に発音されていることは、猫はニャー、犬はワンという日本語でよく分る。しかもワン、ニャーは日本中どこでも同一でバリエーションがない。欧米語

ドイツ語の発音Ⅲ, nとlについて

では犬猫のなき声に[n]が入っていないが、日本人の耳にはナ行ヤンにひびくのである。

5. l の発音には二通りある。-ll- の場合には、前の l は舌の両側と、両側の歯ぐきとの間から、そしてあとの l は舌面と上あごの間からとで発音をし分けている。